

【選評】
大阪大学大学院教授
星野俊也

最新の「パワー論」を 支える未来への情熱



スマート・パワー

21世紀を支配する新しい力
ジョセフ・S・ナイ・著

Joseph S. Nye, Jr. ハーバード大学特別功労教授
山岡洋一・藤島京子訳
日本経済新聞社／2011年7月
定価 2000円+税

し、後者のアプローチは、より人間的である。なぜなら人々の営みは客観的な論理などでは語りえぬものであふれており、かといって沈黙が必ずしも金ではないからである。とりわけ、グローバル化と情報化が進む今日の世界は、国境をまたぎ、人・モノ・カネ・情報が錯綜するコミュニケーションとパワー・ゲームの場となっている。人々は自らの「平和」や「正義」を主張し、他方ががむしやらに持てるパワーや利益の極大化を図ろうとする。それは知性と力の賢明な使い方なのだろうか。

かつてウイトゲンシュタインが「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」と論じたとき、彼はまた、言葉の限界が論理の限界（あるいはその逆）だと考えていた（『論理哲学論考』）。しかし、後期の彼の思想は、

言葉を複数の主体間のコミュニケーションの文脈でとらえ、その言葉がいかなる意味に理解されたのかに着目するようになる（『哲学探究』）。前者が論理を言葉に投射し、ピュアな真理に接近しようとしたのに対

著者のジョセフ・ナイ教授は、本書を通じ、二一世紀の世界を牽引する「スマート・パワー」の重要性を説いている。スマート・パワーとは、物理的な強制や見返りで相手を動かすハード・パワーと、魅力や説得で相手を引き込むソフト・パワーを組

み合わせる外交上の「賢さ」によって得られる力を指している。

著者がことさらに賢慮の要を説く裏には、特に9・11事件から近年まで（それは、ちょうどジョージ・W・ブッシュ大統領の共和党政権の時期と重なるが）、米国のパワー行使が「スマートではなかった」という批判や失望と、政権交代を経て、自身が提唱するスマート・パワー概念が民主党オバマ政権の政策ビジョンに採用されたことへの期待がある。ここには米国を代表する国際政治学者でありながら、先の民主党政権下で国家情報会議や国防総省などの高官としても辣腕をふるった著者のクールな分析と熱い思いが込められている。

そうは言っても、ナイ教授のパワー論はあまりに有名で、いまさら読まなくても、と考える向きもあるかもしれないが、そうした読者こそ本書を手

取る価値がある。実際、ハード・パワーの功罪やソフト・パワーの誤解やスマート・パワーの効用については、本家本元ならではの明快な解説がなされている。また、さらに重要なのは、二世紀の今日、パワーの分布がこれまでとは大きく異なり、二つの顕著なシフト、すなわち、各国間の力の「移行」と、国家から非国家主体への力の「拡散」という現象が起こっている世界の実情が的確に分析されていることである。

力の移行は、BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）の台頭に象徴されるパワー・バランスの変動を示し、力の拡散とは、テロリストやハッカーの暗躍など、新たな脅威の高まりに見て取れる。そして、グローバル化と情報革命のなかで、パワー行使のステージは確実に広がり、サイバー空間でのパワーの競争が極めて現実の問題となってきたことが改めて実感される。

これらの変化は、最強国・米国でさえも管理できない動きの拡大を物語るが、ここで逆に、我々には、ナイ教授が国際政治のダイナミズムのなかでなぜこれほどまでパワーの分析にこだわるのかが見えてくるのではないだろうか。それは、いかにパワーの移行や拡散が起こっても、米国は没落せず、また衰退してはならない、という一つの確信的な問題意識によるものであり、米国が世界をリードする価値への絶対的な信奉を反映している。

もちろん、そのためには米国自身が学習し、成長することも求められる。賢慮の外交には、一層磨きがかけられなければならないのである。これを自己意識の過剰と切り捨てることは簡単だが、空白の歳月を重ね、衰退の危機に面してなお人々に希望の未来を語りえないどこかの国のストーリーに較べれば、うらやましいほど前向きである。

アートとシステムの 二面性を語る 信頼の教科書



インテリジェンス 機密から政策へ

マーク・M・ローエンタル・著
Mark M. Lowenthal 米国インテリジェンス・
安全保障アカデミー会長
茂田宏監訳
慶應義塾大学出版会 / 2011年5月
定価 4200円+税

ジョセフ・ナイ・ハーバード大学

教授の提唱する「スマート・パワー」が賢慮の外交を目指そうとするのであれば、それは「インテリジェンス」に基づくものでなければならぬ。

一つは、直面する状況を的確に把握する知性としての意味であり、もう一つは、国家の安全保障にとって最も基本的な機能の一つであるべきインテリジェンスのプロセス・成果物・組織である。前者は、政策決定や情報分析に携わる人々によって培われるアートに関わり、後者は、政

府の機構としてのシステムのあり方に関わっている。

しかし、国家のインテリジェンスが本来的に機密情報を扱い、秘匿性の高い活動を伴うことから、おのずと過度の神秘化や反発を招きやすい。そして、これらがいずれもインテリジェンスについての健全な理解と適正な運用を妨げていることは言うまでもない。信頼できる教科書が必要とされるゆえんである。

本書は、米国のインテリジェンス・コミュニティの裏も表も熟知する原

著者の手による教科書の待望の邦訳版で、およそこの分野の理解に欠かせない概念・歴史・制度・論点が網羅されている。邦訳は日本の外交・情報部門の第一線での豊富な実務経験と鋭い分析眼に加え、大学での熱意あふれる授業でも知られる監訳者とそのチームが、手堅く、しかも読みやすく仕上げている。

米国中心の記述は原著者も認めるところだが、莫大な予算、強大な組織、最先端の技術を持つ米国のインテリジェンスも失敗する。他方、戦後日本のインテリジェンス体制は、依然として脆弱に過ぎる。国家の進路を正しく見極めるための基盤となる反面、権力者を幻惑する媚薬としても作用するインテリジェンスのアートとシステムを、我々は磨きあげていく必要がある。本書の邦訳が出版された社会的・政策的な意義は大きい。

インテリジェンスの 基礎理論

小林良樹・著

こばやし よしき 慶應義塾大学教授

立花書店 / 2011年3月

定価 1715円+税



実践に 裏打ちされた 深みと展望

国際関係や公共政策の研究や教育の一環として、あるいは一つの専門分野としてインテリジェンスを取り上げることは、米英などでは一般的だが、日本では今もまだ限られた例しかないだろう。評者がしばらく前に大学院の国際公共政策専攻課程で「インテリジェ

ンス分析と対外政策」を科目名に授業を立ち上げたときも、半ば手探りで学問としてのクオリティの保持に腐心したものである。その経験から、本書を通じて、著者が、学術的な理論的枠組

みに基づくインテリジェンスの研究と学習を求めようとしている姿勢には大いに共鳴するものがある。

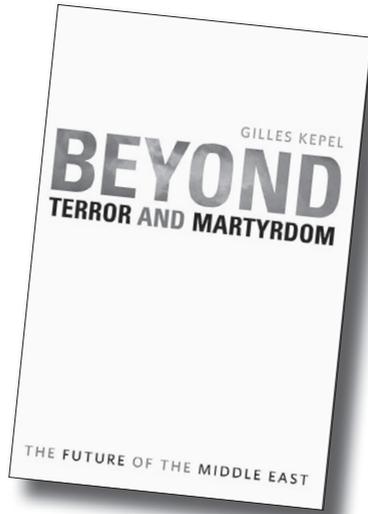
本書は、初学者向けにわかりやすい構成と記述になっているものの、インテリジェンスの基礎理論の下地づくりの面では妥協をしていない。とりわけインテリジェンスの定義・機能・特徴の検討に始まり、インテリジェンスと政策立案・政策決定の峻別、素材情報（インフォメーション）を分析・加工し、それを優れたインテリジェンス・

プロダクトに高めるプロセスやインテリジェンス機関に対する民主的統制、さらに法執行機関とインテリジェンスとの関係性の考察などに至る議論では、実務経験を有する著者ならではの、教科書を越えた専門的な深みを展望させる視座を提供している。

評者が授業のなかでインテリジェンスの問題を取り上げる理由の一つは、それが対外政策決定における情報分析のスキルや分析の妥当性を判断する目を養うことが極めて重要と考えるからである。その点、本書では、それを本来の目的としてはいないながらも、分析すべき課題の設定から、対象の意図と能力や国内情勢と対外関係を含む全体的な分析枠組みの形成、素材情報の扱いや結論のスタイルなど、例を挙げて懇切に説明する。これは本書の構築する基礎理論が実践面にも強いことを示している。■

【選評】
東京大学准教授
池内恵

「ポスト9・11」の時代 とは何だったのか ——ジル・ケペルの軌跡



Beyond Terror and Martyrdom: The Future of the Middle East Gilles Kepel

Cambridge, Massachusetts,
The Belknap Press of Harvard University Press, 2008

二〇〇一年の9・11事件から二〇一〇年になる。国際政治の上で、この二〇〇一年は「グローバル・テロリズム」が展開し、「対テロ戦争」が重要課題となった「ポスト9・11」の時代だったと言っようだろうか。そして、アラブ世界の二〇一一年の政変で、この「ポスト9・

11」の時代は幕を下ろしかけていると考えることもできる。一つの時代は、終わりに近づいてはじめて、その意味や性質が理解されてくる。

鋭い観察者としてのケペル

しかし時代が今まさに作られてい

く最中にも、鋭敏に将来への変化を感じ取り、重要なこととそうでないことを選り分けて、的確な形で物事をとらえ表現していきける、特殊な才能と幾分かめぐり合わせの運を持った人たちが、この世の中には少数存在する。9・11後のイスラーム世界において、何が重要な課題なのか、その課題はどのような形のものなのか。今から考えれば、最も納得のゆく議論を展開していたのは、やはりジル・ケペル（パリ政治学院教授）だった。

「やはり」というのは、ケペルの作品は9・11事件やイスラーム過激派によるグローバル・テロリズムといった近年の事象の出現によって注目を集める前にも、幾度も脚光を浴びてきたからである。一九八〇年からカイロに住んでイスラーム主義運動の調査を行っていたケペルは、八一年一〇月、まさに研究対象のジハード

団によってサーダート大統領が暗殺される事態に遭遇する。最前線の知見を盛り込んだ博士論文は『預言者とファラオ——エジプトのイスラーム過激派』として八四年に刊行され、即座にこのテーマに関する古典的名作となった。ケペルは五五年生まれだからこの時まで二〇歳代である。

処女作でのまるで事態の急展開を見通していたかのような課題設定が、まぐれ当たりではなかったことを、ケペルは次々と発表する作品で証明していった。

一九八七年に刊行した『イスラームの郊外』に始まる、一連の社会学調査は、フランスの郊外に多く住むようになっていたムスリム系の移民とその子孫が提起する政治問題を、表面化するよりも遙か前に指し示していた。さらに九四年の『西洋のアッラー』では、これを欧米各国の移民ムスリム問題の

比較考察に発展させた。そこでケペルはイギリス的な多文化主義による受け入れ策の限界を指摘していたが、そのことはあたかもフランスの「悪しき」同化主義を称揚する自文化中心主義の発露か、はたまたオリエンタリズムの偏見に基づくものであるかのように、英米圏(やそれを表層的に受け入れる日本)で短絡的にとらえられがちだった。しかしイギリスでも多文化主義の負の側面が幅広い立場に認知されるようになるにつれて、ケペルの炯眼は(時に不承不承ながら)再評価されるようになった。

また、『預言者とファラオ』で展開した宗教回帰現象の研究は、キリスト教やユダヤ教での並行する事象と比較した一九九一年の『神の復讐』(中島ひかる訳『宗教の復讐』晶文社)に発展した。

こういった研究分野は、ケペルの後には多くの研究者がこぞって参入した

が、ケペルの前にはほとんど未踏の領域だった。現地に赴き、目の前に存在する、しかしまだ明確に認識されておらず、まだ理論の枠をはめられていない現象を見つめ、卓抜な概念化の才を働かせて対象をアイデアとして目の前に現出させるケペルの手法は、真の「哲学」の営為を感じさせるものである。

米仏のはざまに揺れる評価

しかしそのことが、英語圏、特にアメリカが圧倒的な影響力と活力を持つ社会科学の世界において、ケペルの十全な評価を阻害した面がある。もちろんイスラーム主義研究の場では、ケペルの『預言者とファラオ』は先駆的な研究として常に言及はされてきた。しかしフランス語で書かれ、フランス的な修辭と発想法で組み立てられたケペルの諸作品は、すでに終わった現象について、特定の因果関係の証明を行うこと

によって「理論」を構築し、科学の装いを凝らそうとしていく性向を強く持つ米国の政治学や社会学の場では、どこか懐疑的に見られていた節がある。

そして、確かにケペルの本は、英米圏の学術書の流儀に慣れてしまった者には「読みにくい」。序文だけ熱心に読み、各章の論証やデータを、索引を頼りに拾い読みし、さつさと結論部分に進む、というような読み方は通用しない。論理と感性とレトリックを総動員した文章そのものが対象を浮かび上げさせていく過程を、文学作品を読むように丹念に追っていかなければならぬ。まだ結論が見えていない、さほど重要性を認知すらされていない対象を扱っているため、因果関係といった一方向的な論証がなされるわけではない。読者によって受け止める部分も理解もまちまちになる。

これはアメリカとフランスの学問的

風土、その背後にある学問の社会的役割の違いとして興味深いだけでなく、政治学は万人が手続きを踏めば参加でき再現できる科学（サイエンス）なのか、それとも直観と職人芸や天性の才能にかなり依存する芸術・技術（アート）なのか、という簡単には解決のつかない問題に関わっている。

「イスラーム過激派の伸長」「ムスリム移民問題の顕在化」ですでに十分に脚光を浴びていたケペルに、9・11事件によって「グローバル・ジハード」が米国の対外政策の最重要課題となることによって、またも注目的となった。これについてもケペルはすでに前年に大著『ジハード』（丸岡高弘訳）『ジハード——イスラーム主義の発展と衰退』（産業図書）を著し、イスラーム主義諸集団のグローバルな展開を包括的にまとめていたからだ。

そして確かな評価へ

9・11事件によって、英語圏でのケペルの作品への評価は急上昇し、今に至る。この場合は、狭い専門研究業界ではなく、論壇や政策論の場での注目であり、パブリック・インテレクチュアルとしての評価だった。パスカル・ガザール (Pascal Ghazal) という、エジプト人でフランス語と英語を自在に操る闊達な英訳者も得て、ケペルの著作は急速に世界に広まるようになった。

私もケペルに一度だけ会いに行ったことがある。この九月には、ケペルが二〇〇二年に刊行していた、9・11事件の直後にエジプト、レバノン・シリア、湾岸諸国をめぐる記したフィールド・ノートを翻訳刊行する機会を得た（『中東戦記 ポスト9・11時代への政治的ガイド』講談社選書メチエ）。訳しながら、ケペルが偶然目に入っ

たものをただ記すかのように装った文章が、実に微細に、思想史・政治学・社会学・人類学といった諸ディシプリンを駆使して対象を切り分け、再び統合する営為を包含していることに、戦慄に近いものさえ覚えた。二〇〇一年の時点ですでにケペルは、一方で超大国に打撃を与えたグローバル・ジハードに興奮する若者がありながら、他方でその同じ若者たちがグローバルな消費社会や欧米文化の普遍性に魅惑され、個人としても社会集団としてもその内側に激しいせめぎ合いを抱えていることを、観察していた。さらに「異教徒へのジハード」の次に来るものは、全面的な文明間の対立ではなく、グローバル化に侵食されたイスラーム教徒の社会の中に生じてくる、信仰者同士の闘争すなわち「フィットナ（騒擾）」であることを予見し、フィットナド・

ノートに繰り返し記していた。

ケペルが9・11直後に感知した、迫りくるムスリム社会の内乱は、イラク再建の過程でスンナ派・シーア派間の宗派紛争として現実化した。今年二〇一一年に顕在化したアラブ各国の激動は、さらに次の段階でのムスリム社会内の闘争の顕現と解釈してよいだろう。

この間ケペルは〇四年の『ジハードとフィットナ——イスラム精神の戦い』（早良哲夫訳、N.T.T出版）、そして〇八年に本書『テロと殉教——「文明の衝突」をこえて』（冒頭の写真は英訳版。邦訳は丸岡高弘訳、産業図書）を刊行し、『中東戦記』で感覚的・断片的に記していた「フィットナ」が現実化し、イスラーム諸国だけでなく西欧諸国を最前線として展開していく過程を分析し、世界の一般読者に発信してきた。

二〇一一年のアラブ政変に関して、ケペルは何を書いてくれるのだろうか。本書の献辞には、若い元氣な研究者たちが出てきたから、本書を「最後の著作」としたいと記されている。ケペルはまだ隠居するほどの年齢ではないだろう。

本というものは安価に手に入り、飽きれば捨ててしまってもよいようなものだけれども、そこに書かれている言葉の背後には、時にとてつもなく崇高なものが潜んでいる。それは読者が積極的に捜しに行かない限りは見つからない。書き手が聖人君子だといったことではない。人類の歴史の大きな波を、一人の頭脳で受け止めるかのような役割を担う人が時に現れる。ジル・ケペルはそのような役割を負わされ、そして十分にその任を果たしてきた。■